

広大な「経方」の世界を分かりやすく解説。

シリーズ第2作—「傷寒・金匱」方

図解・表解でわかる方剤の意味、比較方式で各方剤の特徴を解説。

【学ぶ楽しさ】—仲景学説（『傷寒論』『金匱要略』）の教材として

- 原典に「縛られすぎず離れすぎず」に経方の世界を紹介。
- 歴代のさまざまな解釈を紹介し、その問題点や利点を指摘。
- 経方を「法」という観点から捉えて理解する。
- テーマ毎に多くの症例を提示し、より具体的な理解をサポート。

【使う楽しさ】—臨床の実用書として

- 方剤ごとに「適応証」「薬の作用」「使用法」を分かりやすく解説。
- 方剤を「さまざまな用薬法の集合体」と捉え、多くの応用例を紹介。
- 常識的な使用法のほか、広い範囲にわたる発展的用法も知る。
- 「漢方製剤の使い方」から「生薬の処方」まで、段階的に理解する。

〈本書で取り上げた方剤〉

- 半夏瀉心湯 ●三黄瀉心湯 ●四逆散 ●麻黄湯 ●麻黄附子細辛湯
- 白虎湯 ●白虎加人参湯 ●小青竜湯 ●苓桂朮甘湯 ●猪苓湯 ●五苓散

著者◎**小金井信宏**

著者は、10年間中国に留学、日本人として史上初の碩士（北京中医薬大学大学院修士課程卒）となる。

好評発売中!

B5判並製／本文352頁／定価…4,410円（税込）

わかる・使える漢方方剤学〔時方篇〕小金井信宏 著

中医学を学ぶための雑誌『中医臨床』（季刊）ますます面白く、実用的な内容になっています。

東洋学術出版社

ご注文は、メールまたは
フリーダイヤルFAXで

FAX.0120-727-060

〒272-0822 千葉県市川市宮久保3-1-5／電話047-371-8337／E-mail:hanbai@chuui.co.jp／ホームページ●http://www.chuui.co.jp/●http://www.chuui.com/

「経方篇1」小金井信宏 著

B5判並製／本文340頁
定価…4,410円（税込）

わかる・使える 漢方方剤学

《学習意欲をかき立てる、面白い方剤解説》

NEW ISSUE
新刊

小青竜湯

◇水飲による喘息治療の代表方剤

「青竜」とはどんな方剤か？

- 青竜とは？ ●竜とは？
- 大青竜湯・小青竜湯と青竜
- 太陽経・少陰経と麻黄・細辛

1 基本を押さえる

(製剤の使い方)

1. どのような患者に使うのか？

- 小青竜湯の適応証
- 弁証の要点
- どんな疾患に使えるのか

2. 小青竜湯とはどんな薬か？

- 構造
- 解説

3. どのように使うのか？

- 基本的加減法
- 使用法
- 使用上の注意
- 服用後の反応と副作用

2 応用のための基礎知識

(小青竜湯の背後にある中医理論)

1. 基礎理論

- 水気と小青竜湯
- 『傷寒論』『金匱要略』の小青竜湯証
- 五味子と咳——散収併用
- 麻黄と喘息 ●小青竜「法」の応用

2. 臨床応用

- 原書の加減法 ●細辛の用量について
- 『金匱要略』の用法（浮腫などへの応用）
- 張錫純の方法 ●吳瑭の方法
- 喘息への応用 ●アレルギー性鼻炎への応用
- 針灸による治療

3 疾患・病証別使用例

(治療例のまとめ)

1. 呼吸器疾患——①急性気管支炎
②慢性気管支炎
2. 循環器疾患——肺性心
3. 消化器疾患——慢性胃炎
4. 泌尿器疾患——急性糸球体腎炎
5. 婦人科疾患——続発性無月経
6. リウマチ性疾患——関節リウマチ

目次

- ◇半夏瀉心湯
痞証（寒熱錯雑症）治療の代表方剤
- ◇三黄瀉心湯
瀉火方剤の元祖
- ◇四逆散
「疏肝剤の元祖」と呼ばれる（疏肝＝肝の気を通す作用）
- ◇麻黄湯
辛温解表の代表方剤
- ◇麻黄附子細辛湯
助陽解表の代表方剤
- ◇白虎湯・白虎加人参湯
清法による気分熱証治療の代表方剤
- ◇小青竜湯
水飲による喘息治療の代表方剤
- ◇苓桂朮甘湯
痰飲（狭義）治療の代表方剤。「水剤の魁（さきがけ）」と呼ばれる
- ◇猪苓湯
「陰虚十下焦濕熱」による泌尿器疾患に多用される
- ◇五苓散
水液代謝の失調を根本から解消。広範な「水証」治療に応用される

「履歴書の束」から「活きた方剤学」へ

この本は、私が理想とする「方剤学の教科書」を形にしてみたものです。

方剤学の教科書とは「履歴書の束のようなもの」に過ぎないと、私は考えています。どんなに有能な人でも、履歴書をみただけでは、その人材を適材適所で使いこなすことはできません。それは方剤も同じです。「その方剤は、どんな理論に基づいて作りだされたのか」「その理論は、どのように生まれたのか」「その手法や理論は、その後どのように受け継がれ、現在はどういう位置にあるのか」など、1つの方剤を理解するには、その周辺の事情をたくさん知る必要があります。

しかし中医学の世界には、主要な文献だけでも数百冊はくだりません。その内容を可能な限り盛り込み、読んだ後で「よく分かった」と実感できるような本を作りたいと努力してみました。とても「理想の教科書」とはいえませんが、少なくとも「履歴書の束からは脱皮したもの」として、本書を世に送り出したいと思います。

(著者「まえがき」より)